

みんなちがって みんないい



宮城県 仙台二華中学校 3年

鈴木 美紀

第5回日本語大賞 中学生の部 優秀賞 受賞作品

みんなちがつて みんないい

宮城県 仙台二華中学校 三年 鈴木 美紀

私には四歳上の姉と三歳上の兄、そして一歳下の妹がいます。他とちよつと変わったところを挙げるとしたら、兄は重度の自閉症児、妹は広汎性発達障害児ということですが。

自閉症という障害は、総じて人との関わりが苦手です。加えて大なり小なりこだわりがあり、不安が先行すると最悪の場合パニックです。兄の場合はいまだに言葉が出ないので、そのもどかしさから所構わず大声を出します。

発達障害の妹は負けず嫌いで、何でも私の真似をします。確かに出来ることは多いのですが、さすがに全て同じというわけにはいきません。自分には不可能と察すると地団駄を踏んで暴れ、自傷行為に及ぶこともあります。

兄と妹は、その精神の高ぶりを抑えるため、薬を服用することがあります。薬に頼ることは、本人にとつても家族にとつても好ましい場合があるからです。しかし、そんな医療の力を借りても、全てがよい方向に転ずるわけではありません。私たち家族は、肩身の狭い思いをしてきたからです。「しつけが悪い」「うるさい」などと、冷たい目を向けられ、きつい言葉を浴びせられたことも一度や二度ではありません。姉と私にあっては、「お前の兄妹バカ」「あんな兄妹でかわいそう」などの陰口が耳に入る度に、心臓がえぐられるような痛みに陥りました。

「どうして普通じゃないのだろう」

兄と妹のことを守り、率先して理解しなければならぬのに、私は兄と妹を避けるようになりました。二人の存在を恥ずかしく思い、隠すようになったのです。

そんな思いを抱きながら、私は障害児家族のキャンプに参加しました。今から五年前の話になりますが、このキャンプが私の転機となりました。私の意識が百八十度変わった、と申しましょか。「みんなちがつて みんないい」を実感した一泊二日だったので。

キャンプでは、様々な場面で垣間見る障害児と彼らを取り巻く家族の愛に心が洗われ、救われる思いがしました。実にたくさんの素敵な笑顔に出会えたからです。心が触れ合い生命の息吹を感じるにつれ、自分は健常者というおごりも無くなり、私の中の『障害者』別世界の弱い人』という公式も消えていました。

ふと兄と妹を見ると、二人もボランテニアの学生さんに心を開き、とびっきりの笑顔で活動しています。そんな二人の姿を見て、私は二人の笑った顔を久しく見ていないことに気がつきました。私は、「みんなとは違う」兄妹を持つ、「不幸で気の毒な人」という印象を払拭する努力もせず、二人から、そして現実から目をそらしていたのです。偏見や差別のない社会を望んでいるのに、私自身が自分の歪んだ物差しで兄と妹を見ていたのです。ある学生さんは、言いました。

「障害あるなしに関係なく、世界中には本当にいろいろな人がいて、それぞれいろいろなものを抱えて生きている。ありのままを丸ごと受け入れる気持ちがあれば、障害があるうとなかろうと心は通じ合えると思うよ」

悶々とした気持ちを隠していたつもりですが、学生さんには見透かされていたようです。そうです、人は持つて生まれたものや能力が違います。置かれている立場や境遇も異なります。人と向き合うには、まずは相手を知ろう、分かってあげようとする心が大事な

です。心の叫びに耳を傾け、助けや求めがあれば手を貸すという当たり前のことを、誰に對しても自然にできること。その心がいじめをなくし、障害者にも優しい世の中になると信じる私は、共に認め合う社会こそが幸せを生むと考えるようになりました。

私は変わりました。そして、決めました。兄と妹の存在を隠さず、ひるむことなく生きていくことを。強い気持ちで人々の心に潜んでいるバリアをも壊していくことを。分岐点ではしばし立ち止まり、迷うこともあると思います。しかし、人として険しくても正しい道を、温かい道を見極め、しっかりと歩いていきたいと思えます。

「あなたが一番伝えたい言葉は何ですか？」

と聞かれたら、私は迷わずこの言葉を選ぶでしょう。

「みんなちがって みんないい」

私の心で生きている言葉、みんなの心にも生きてほしい言葉だからです。